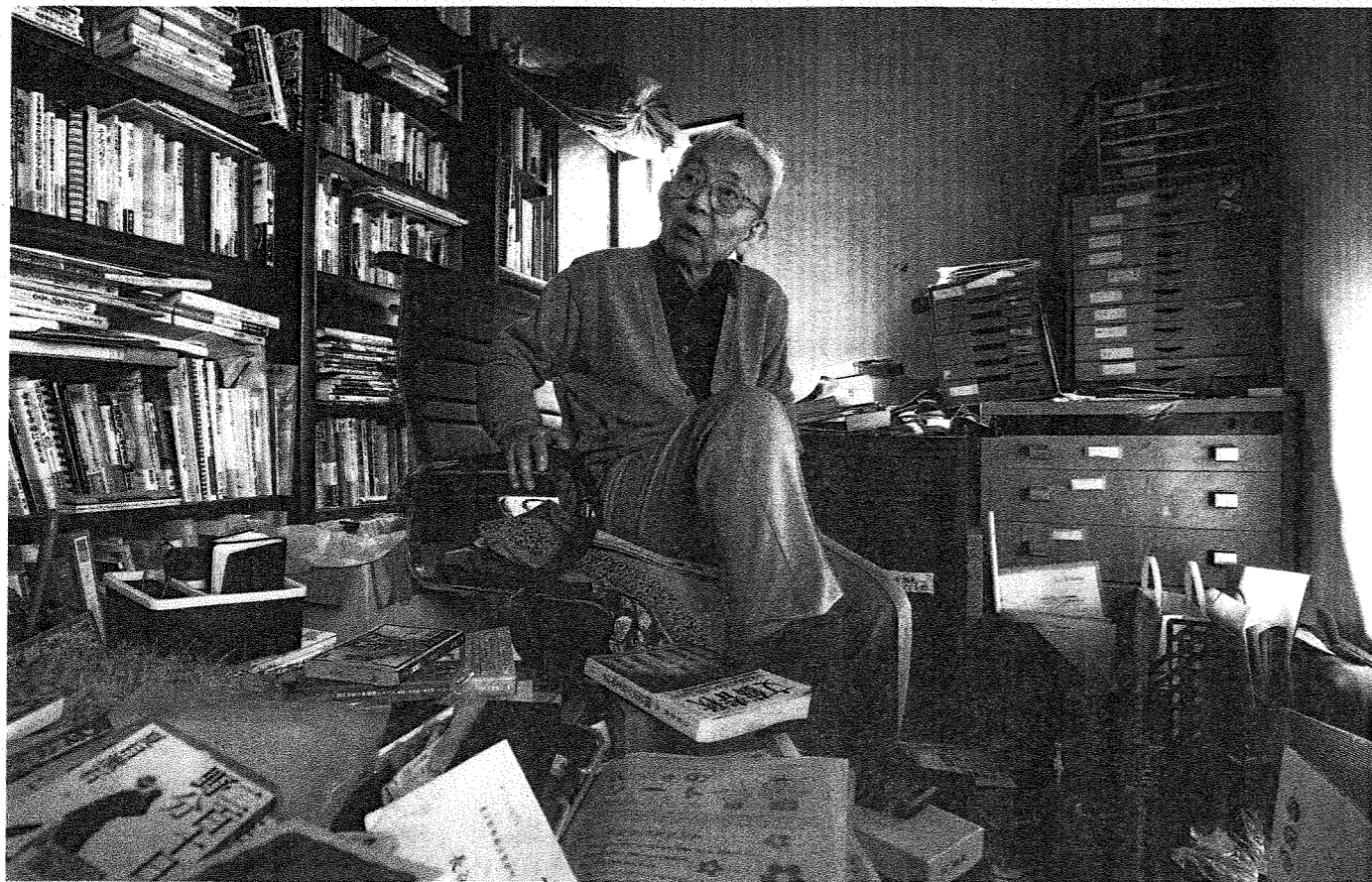


解説



仕事場には、専門書や大好きな夏目漱石の本などが所狭しと並ぶ。「ここが、僕が闘ってきた戦場」＝東京都内の自宅で、鈴木竜三撮影

認知症医療の第一人者で、診断に使う認知検査の開発者として知られる精神科医の長谷川和夫さんが、自ら認知症であることを明らかにした。半世紀にわたって診療と研究に携わってきた医師は、今、何を思うのか。
(編集委員 猪熊律子)

しょうがない
年相応の物忘れもあるが、長い診療経験から認知症であることに間違いはない。自分がやっただごと、やらなかったことへの確信が持てない。例えば家を出た後、鍵をかけたかどうかの自信

精神科医
長谷川和夫さん 88

はせがわ・かずお 認知症介護研究・研修東京センター名誉センター長。聖マリアンナ医科大学名誉教授。認知症の簡易認知検査「長谷川式簡易認知評価スケール」を中心として開発し、1974年に公表。改訂版は91年に公表。

*文中の写真は順に「毎日使っている日めくり」「お気に入りのつえ」「たくさん持っている帽子の一つ」

診療と研究50年 日本のケア「輸出を」 運命に任せ、今を生きる

が、引き返して大丈夫ならそのまま出掛けるのが普通だが、それを何回も繰り返さなくちゃいけない。今日が何月何日で何曜日かわからなくなる。何度も家内に関わり合わせ、またそんなことを言っていると聞かされたり。だから今は日めくりを使っている。新聞は朝刊も夕刊も日付が書いてあるからいいね。真っ先に見て確認している。

い。長生きすれば誰でもなる。ひとごとじゃないってこと。100歳を超えてならなれば力ビカの人もいるが、時間の問題だと思ふ。
△認知症は高齢になるほど多くなる。国の研究班の推計では、60代後半で3%程度、80代後半では40%程度、95歳以上では80%程度になる。△周囲を正しく認識できなくなるには段階がある。まず、時間の見当がつかなくなる。次に場所の見当。最後が人に対する見当。今の薬は進行を遅らせることができるから、この世にいる間は時間だけで済ませ、後は先送りできればいいけれど、それはわからない。完全な治療薬が待たれるが、脳の神経細胞は加齢で自然の経過として壊れていくわけだから、人為的に完全に食い止めるのは限界があると思ふ。副作用が出る恐れもある。だから、ありのままを受け止めることがより大切だと思ふんだ。

ひどかったね。認知症の人は役立たず。家の恥。とされ納屋に鍵をかけて閉じ込められていたり、終日寝床でほうっておかれたり。家で見られなくなる。精神科病院や老人病院に入れられ、手や腰を縛られた。隔離と収容と拘束。そういう時代だった。
△70年に、日本は65歳以上の人口比率が7%を超え、「高齢化社会」に突入。72年に出版された「恍惚の人」(有吉佐和子著)は、認知症が家庭にとどまらない社会的な課題であることを浮き彫りにした。しかし、国は対応の難しさから、「寝たきり老人」対策を先行。認知症への本格的な取り組みは80年代後半以降となった。

待つというよりは、時間をその人に差し上げることだと思ふんだよね。ケアの先進地、福岡県大牟田市では、徘徊する人をみんなで見守ってきたが、最近では、認知症の人をもうでない人も一緒に歩くような取り組みもしているという。「守るケア」から「共に歩むケア」へ、だね。こうした日本の知恵を、急速に高齢化が進む東南アジアの国々に輸出したいらいいと思ふ。看護や介護に習熟した人が日本の介護技術を教えに行き、その国に合った仕組み作りにも協力する。認知症は今や世界的な課題。高齢化のトップランナーである日本が世界の役に立てる分野だ。

△国際アルツハイマー病協会の推計によると、認知症の人は15年時点で世界に4700万人近くおり、50年には1億3000万人以上になる。△私も、この世に生きているうちは、社会や人様のお役に立てることは進んでやりたい。多くの人の支えや絆に感謝しながらね。この先、自分がどうなるかはわからない。自分や身近な人のことがわからなくなったらどうしようとの恐れはある。でも、落ち込んでいるより、人と話してみること、一歩踏み出すことが肝心。宗教や祈りも力を与えてくれる。自分にできることをしながら後は運命に任せ、今を生きていく。そう思っているんですよ。

認知症 ありのままの僕

拘束の時代
認知症と関わり始めたのは約50年前。米国の留学から戻り、大学でてんかんの診療をしていた頃、恩師の新福尚武先生から診断の物差しを作れと言われた。当時は「痴呆」と呼ばれ、統一した診断基準がなかった。

△痴呆の由来を調べた厚生労働省の資料によると、認知症を表す「Dementia」は、明治初期に出た医学用語「医語類聚」では「狂ノ一種」と訳されていた。その後、「痴狂」「癡癪」「痴呆」などと訳されたが、明治末期に日本精神医学の権威、長谷川三三が「狂」の文字を避ける観点から「痴呆」を提唱。それが定着した。1970年前後に、物差し作りで各地を回ったが、

「共生」の先進地
認知症の本質は、これまでで暮らしてきた生活が、本人に負担をかけること。本人は相当つらさ、悲しい思いを

△左から東京慈恵医大時代の長谷川さん(1995年、「痴呆」から「認知症」への用語変更を促す新聞記事(2004年)、視察に来られた天皇、皇后両陛下、説明する長谷川さん(認知症介護研究・研修東京センター)、1997年、「恍惚の人」が出版された頃の有吉佐和子さん(1997年)、妻の瑞子さんと(2017年)

自分は認知症だとう人があまりに理路整然と話す。疑いたくなることも過去にもあった。だが、早期診断が進んだこともあり、自分の想いを自分の言葉で語ることはできる人は増えている。約15年前、講演で「将来、自分が認知症になったらよく観察して、ご報告したい」と話していた長谷川さん。隠す人も多い中、自ら公表した態度に誠意と、認知症への正しい理解を社会に広めたいとの強い意志を感じた。(律)

△痴呆の由来を調べた厚生労働省の資料によると、認知症を表す「Dementia」は、明治初期に出た医学用語「医語類聚」では「狂ノ一種」と訳されていた。その後、「痴狂」「癡癪」「痴呆」などと訳されたが、明治末期に日本精神医学の権威、長谷川三三が「狂」の文字を避ける観点から「痴呆」を提唱。それが定着した。1970年前後に、物差し作りで各地を回ったが、

△左から東京慈恵医大時代の長谷川さん(1995年、「痴呆」から「認知症」への用語変更を促す新聞記事(2004年)、視察に来られた天皇、皇后両陛下、説明する長谷川さん(認知症介護研究・研修東京センター)、1997年、「恍惚の人」が出版された頃の有吉佐和子さん(1997年)、妻の瑞子さんと(2017年)



自分は認知症だとう人があまりに理路整然と話す。疑いたくなることも過去にもあった。だが、早期診断が進んだこともあり、自分の想いを自分の言葉で語ることはできる人は増えている。約15年前、講演で「将来、自分が認知症になったらよく観察して、ご報告したい」と話していた長谷川さん。隠す人も多い中、自ら公表した態度に誠意と、認知症への正しい理解を社会に広めたいとの強い意志を感じた。(律)